連載

次代の農業を担う

～栃木県農業大学校生のチャレンジ～ ⑥

栃木を担うイチゴ経営者を目指して！

ハウスでイチゴ収穫

スカイベリーの糖度を調査

私の家（真岡市沖）は「とちおとめ」を栽培する専業農家で、父を中心に家族でイチゴ生産に取り組んでいます。

私は、将来家の農業を継ぎたいと考え、栃木県農業大学校へ入学しました。農大ではイチゴについて幅広く学び、卒論に向け品質や収量など日々調査している中で「とちおとめ」の奥深さに感銘を受けました。また、イチゴの育苗から出荷販売など、生産から消費までの流れも学び、改めて農業の大変さや大切さを知りました。

農大では、「とちおとめ」のほかに栃木県のブランドである「スカイベリー」を栽培しています。品種にあった栽培方法を学び、将来就農する時にスカイベリーを導入して経営の安定化を図りたいと思っています。農大で真剣に学び将来役に立つ栽培技術を身につけたいと思います。また、実習を通して、先生や友達とコミュニケーションをとりながら協力し考えながら作業する大切さも学び、より良い経験ができたと感じています。これからも、お互い切磋琢磨していきたいです。

一年生の夏休みに実施した先進的経営体実習では、イチゴ農家にお世話になりました。農大とは違って一つのハウスが大きく栽培規模も大きいため管理作業がたくさんあり、経営者として栽培管理していくことの大変さが良くわかりました。一カ月の実習で我が家とは違う経営内容を知ることができとても勉強になりました。将来はこの経験を生かしてイチゴ経営を行いたいと思います。

最近では、6次産業化に取り組んでいる農家もあると聞いています。出荷できず残ってしまった物を加工して販売する事で経営の幅がより広まります。今後栃木県のイチゴがもっと有名になるよう、新しい加工商品が多くなれば良いと思っています。

残り一年間でイチゴ栽培の技術を高め、将来は最高のイチゴを作り、立派な生産者として栃木のイチゴを担えるよう努力していこうと思います。

（園芸経営学科野菜専攻・須藤　勢矢）

質の高いトマトにさらに付加価値を

私は、将来父のトマト経営を継いで、規模と販路を拡大したいと考え、農業大学校に入学しました。

我が家（鹿沼市上日向）のトマトは、フルーツトマトと呼ばれる甘みが強いトマトで、質にこだわった栽培により他のトマトと差別化し、味の良さで直売所や固定客の信頼を掴んでいます。しかし、質にこだわった生産は、収量が通常の半分以下になってしまい、更に廃棄扱いの量が多いことが課題です。そこで私は収量を増やすにはどうすれば良いか、廃棄となるトマトに付加価値を付けるためには何が必要でどんな技術を学ばなければいけないかを考えるようになりました。

ミニトマトを収穫

トマトの誘引作業

私が学ぶ農大には土耕栽培と水耕栽培があり、私は管理がしやすく衛生面で優れていて安定した収量の水耕栽培に興味がありました。実習ではロックウール培地を使用した水耕栽培で、ミニトマト三品種を栽培しましたが、我が家のトマトよりも成長がとても早いことに気づきました。また、病害虫の被害がまったくと言えるほど出ないことにも驚き、さらに興味と関心が深まりました。

一年生の九月に実施した先進的経営実習では、家族とパート雇用によるトマト経営農家にお世話になりました。夏のハウス内の作業はとても暑く、体力に自信があった私ですが毎日ヘトヘトになりました。農大や我が家と比べてハウスの規模や収量が大きく違い、様々な管理作業を体験できました。また、実習中に他の農家を訪問する機会があり、目指す経営目標や販路などについて話を聞くことができました。

販売の面ではスーパーやデパートなどへの出荷、庭先での直接販売など、私の知らない販路がたくさんあることを学ぶことができ、私が将来どのようにトマトを栽培し、販売していくかを考える上でとても貴重な経験になりました。

今後は、農大で確かな栽培技術と加工方法を身につけ、栃木の農業を担うものとして、高品質なトマトを安定して生産・加工・販売していけるような経営者になりたいと考えています。

（園芸経営学科野菜専攻・根本　凱叶）

農業大学校ホームページ
http://www.pref.tochigi.lg.jp/g63/index.html